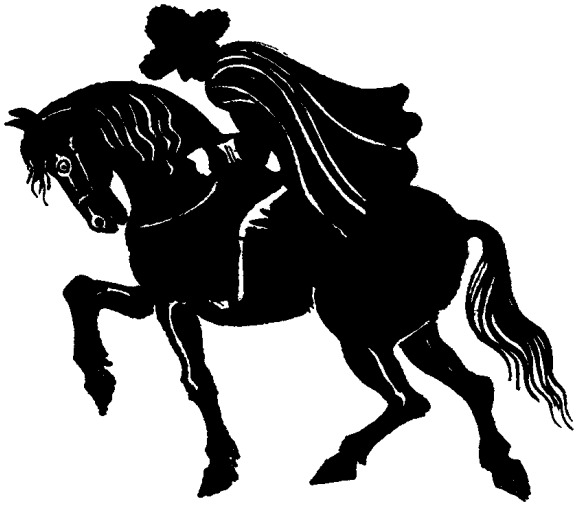
チベットのものいう鳥

田海燕編　君島久子訳

923　チベットのものいう鳥
田海燕編
君島久子訳
岩波書店　1977
292 p.　22 cm　（岩波の愛蔵版 43）
小学 5, 6 年以上
田海燕：金玉凤凰，1961.

岩波の愛蔵版 43
■チベットのものいう鳥　定価一五〇〇円
一九七七年四月二十六日　第一刷発行 ©
訳　者　君島久子
発行者　東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ五
岩波雄二郎
発行所　101 東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ五
株式会社岩波書店
電話〇三-二六五-四一一　振替東京六-二六二四〇
本文印刷　大日本法令印刷株式会社
製本　株式会社三水舎
表紙・箱・見返印刷　錦印刷株式会社
落丁本・乱丁本はお取替いたします

チベットのものいう鳥



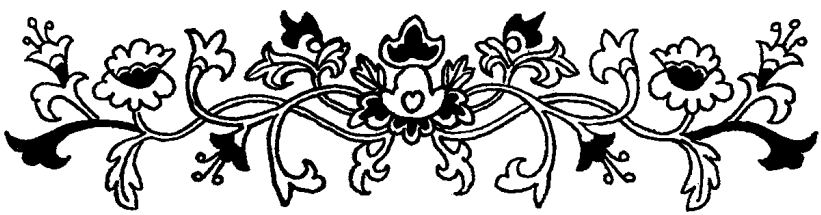
田海燕編
君島久子訳

岩波書店

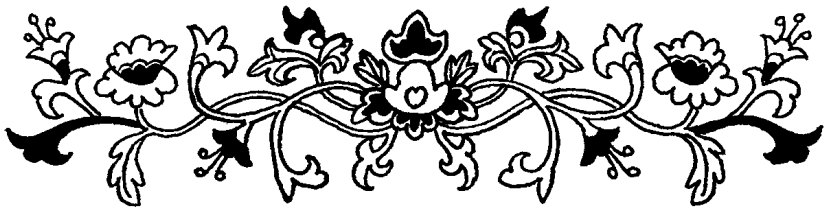
もくじ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1 ふたごの王子と魔術師……9
2 ものいう鳥をたずねて……25
3 ふしぎな紙切り老人……38
4 生きた人形……51
5 金沙江の女軍……56
6 金花と銀花……82
7 慈善家とカメ……93
8 白鳥になった王子……101
9 竜の目をかく……125
10 九色鹿……132
11 一本の手……140

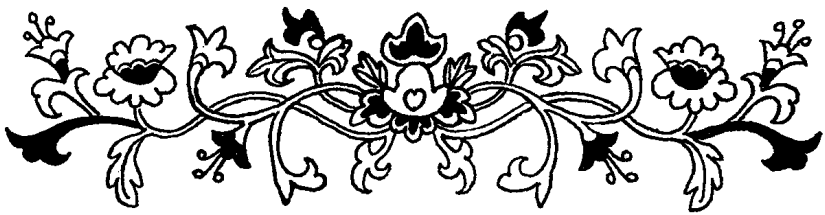


12 黄金の夢……142
13 如意宝……156
14 金玉を吐きだす物語……169
15 竹娘……184
16 チャアルカンのさばき……202
17 幽霊とおくびょう者……210
18 三人のラマの本心……218
19 国王と同名の人……220
20 六人の友と大きな金の鳥……227
21 双頭の鳥……240
22 軍馬が石臼をひく……244



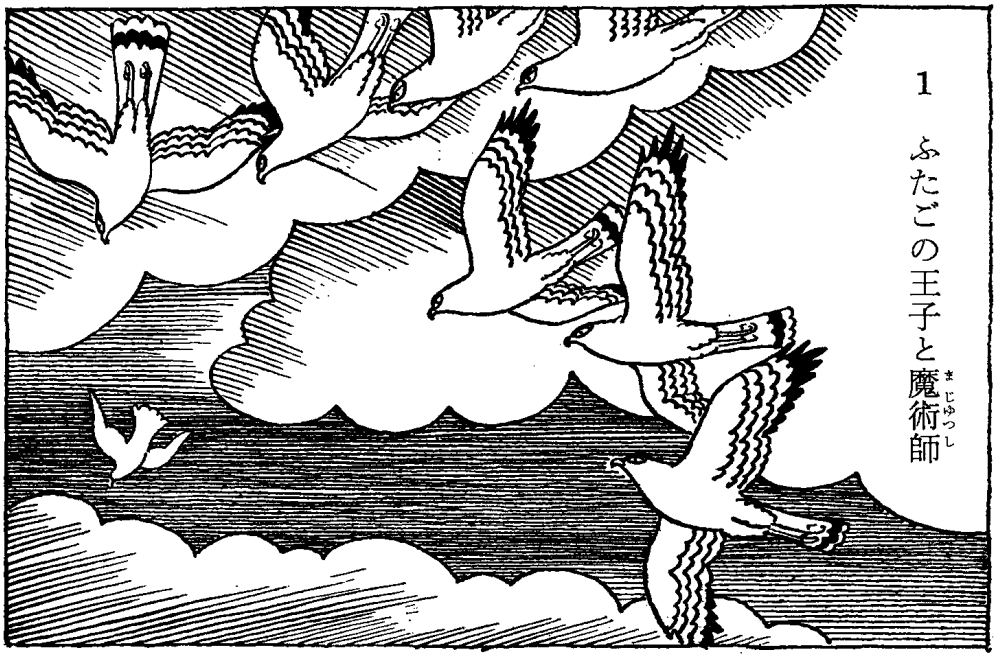
23 ジャーマの機転……246
24 もどった銀貨……262
25 しっぽと頭のあらそい……265
26 白蛇をたすける……268
27 結末……281
訳者あとがき……285

太田大八絵



チベットのものいう鳥

田海燕（ライエン）編
君島久子（きみしまひさこ）訳
太田大八（おおただいはち）画



1 ふたごの王子と魔術師

むかし、一人の国王とその后がいた。年老いてから、やっと、ふたごの王子が生まれた。二人の兄弟は、顔かたちから体つきまで、うりふたつ、衣服の色や型も同じなので遠くで見ると、朝やけに映える二つの白い蓮の花のようだった。

すべての大臣やラマ(ラマ教の僧)は、みなみな平伏して、国王と王子のために祝福していた。

だが、なぜか国王と后は眉根をよせて、喜びとともに憂いの思いを、かくすことはできなかった。

なぜだろうか。

そもそも兄の王子は、生まれつきとてもかしこく、二歳の時に字をおぼえ、三歳で本を読み、五、六歳で歴算(1)や武芸、工芸を学び終えた。かれ自身も七、八歳のころには、国王にふさわしいものをすべて身につけてしまったと、自慢していた。

実際はそれほどでないにしても、王子が特別にかしこいということを、否定するものはいなかった。法

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

術にすぐれた雪山隠士(2)でさえも、口ではかれをまだまだ幼いといいながら、胸の中では、「菩薩の生まれかわり」だとほめたたえずにはいられないほどだった。

ところが、兄王子と同じ母から生まれた弟の方はというと、外見は兄と同じように成長しながら、腹の中は愚か虫で満ち満ちていた。十歳になっても数がわからない。十二歳でもまだおねしょをするしまつ、読書や文字などは、まるで無縁なのはいうまでもなく、歴算、武芸も関係なし。これこそよくいわれる「一本の木に花二つ、一つは香り、一つは臭い」のたとえどおりである。

こうしたことは、おそくなって子宝にめぐまれた国王や后にとって、喜びでもあり憂いでもあった。

王と后は、いつも神仏をおがみ、焼香して、弟王子が、かしこくなってくれるよう祈り、またしばしば教師をたのんで、教育してもらっていた。だが王子は、筆をとると身ぶるいして、自分の名を書くことすらできない。王は万策つきたので、登朝して家来たちに向かい、王子をかしこくする方法はないかと意見を求めた。

いならぶ文武の役人たちは、だれもかれも顔を見合わせ、おしの烏雀の群れのようだったので、王はたいそう腹をたてた。

ちょうどこのとき、門の外から、歌声がひびいてきた。

おしが口をきき、
石がうなずき、(4)

愚者が聡明になり、
知者は我を首とする。

歌声は、烏雀どもをよびさました。役人たちは、すばやく錦袍(にしきのうわぎ)をひきずり、かんむりのちりをはらい、ひしめきあいながら、口ぐちに奏上した。

「わたくしに、愚を治す方法がございます。」

「わたくしに、悟す策がございます。」

「わたくしに、聡明になる薬がございます。」

かまびすしい声は、一時に梁を振るわせ、殿上のほこりがふっとび、玉座の王の耳にまでひびきわたった。国王は、はっと顔色を変え、ほこりの中でぬかずいているそれら烏雀どもを、怒りのまなざしで、にらみわたしてから、警備の兵に叫んだ。

「はやく、うたっている者を、呼んでまいれ。」

うたっていた者は、飄然と入ってきた。一人また一人と、七人の魔術師が、すうっと入ってきたのだ。かれらは歩くにも、地面に足がついていなかった。

始めの一人が、空に飛んでいる鳥を招いた。鳥は笑いしゃべりながら、国王の目の前へ飛んできた。

二番目の者が、宮廷の門を指さすと、門はぱっと二人の神将に変わり、威風堂々と殿上にのぼってくる。

三番目の者が、口を開き、庭の花をつけた木を吹くと、花は一群の仙女に変わって、音楽をかなで、舞を

まった。

四番目が、警備の兵士に向かってにっこりすると、兵士は身をかえして后と二人の王子を導いてきた。

五番目が、兄王子に向かって呪文をとなえると、兄王子はたちまち、弟のように愚か者になってしまった。

六番目が、弟王子に向かってうなずくと、かれはみるまに兄王子のように聡明になり、殿上におきたふしぎな出来事を、すぐさま詩によんだ。

七番目が、大臣たちに向かってさっと手を振ると、大臣たちは、ことごとく烏雀に変わって、空に舞いあがり空中に輪をかいた。

国王と后はこれを見てふしぎに思い、またおどろき、にわかに胸の中で、ふつふつとたぎるものを感じていた。弟王子が、突然かしこくなったのは、むろんすばらしいことだ。しかし、兄王子が愚か者になり、家臣たちが鳥になったのでは、「あぶはちとらず」であるばかりか、かえって、王位を誰がつぎ、国を誰が護るかという心配が生じた。

国王夫妻は、ここに思い至ったとき、思わずさむけがしたが、すぐ気をとりなおして、ほほえみをいっぱいに浮かべ、うやうやしく七人の魔術師に向かって座につくよう請うた。

七人の魔術師は、昂然として座につくと、互いに自分の腕前をひけらかし語ったので、きくほどに国王は心がおののいた。いまはむしろ、息子がかしこくなるのを求めたことさえ忘れて、まず鳥にされた大臣たちをもとにもどすことがかんじんと、魔術師に向かい丁重に頼んだ。

「大師がたの法術が、いかにすぐれているかは、ただ今拝見いたした。そのお力を無駄についやすべきで

はないと存じますゆえ、かれらをもとにもどしていただきたい。」

「それはたやすいことです。」

魔術師たちは、笑みをうかべて答え、呪文をとなえた。すると、またたくまに、すべてのものがもとにもどり、何事もなかったようであった。

大臣たちは、はっと我にかえって、いましがた受けた屈辱を思いながら、誰もかれも心中くやしくてたまらない。頭をあげてみると、王も后も、また満面に憂いの色をうかべている。

みなが、ふりかえって弟王子をみやると、これもほうけたようにぼんやりしているではないか。みなはあわててわれさきにと、王のごきげんをとった。

「大王には福があり、異人(魔術師)には術があります。どうして王子が、聡明にならないはずがありましょう。」

国王は心の内で悟った。これらの魔術師は法術をもって弟王子をかしこくすることはできるけれども、しかし、かれらを王宮内に留め、大きなわざわいをひきおこすべきではない。そこで魔術師に対して厚く礼をし、報酬をあたえて、弟王子がかしこくなるよう教育してはもらえまいかときりだした。

七人の魔術師は、たがいに流し目をして、ひとしきり笑ったあと、いたけだかにこういった。

「これはわたくしどもの、一時のなぐさみにすぎません。どうして殿下をお教えして、聡明にすることなどできましょう。」

かれらはそういいながら立ち上がり、いまにも帰ろうとするようなそぶりをみせた。あわてた王と后は、

涙をはらはらとこぼした。家臣たちもまただまりこくって、ひたすら魔術師たちの立ち去るのをおそれるばかりだったので、王はかれらの無能をののしった。

宰相はあわててふりかえり、魔術師たちに向かって、口をきわめて頼みこんだ。かれらはしばらくしてからひややかに答えた。

「試みてみましょう。しかし、期限はきりませんぞ。」

これは、先方の言い分である。国王はやっとにっこりして

「しかし、一日も早い成功を望みます。謝礼は充分に差し上げます。だが宮中は、さほどひろくはないので、どうかこの王子をお連れくださるように。」

王は、七人の魔術師が、さらにかけひきをやるのかと思っていたが、思いがけず、かれらはすぐさま、異口同音に承知した。

こうして魔術師たちは、王からたまわった幾駄もの品々をたずさえ、弟王子を連れて、意気揚々と、ヤラシャンポ雪山へもどっていった。

またたくまに三年がすぎた。

国王は、しばしば大臣たちをつかわして、多くの謝礼の品々をとどけさせた。しかしいつも、弟王子が、聡明になったという消息が、もたらされたことはなかった。魔術師たちは、そのつど大臣にこう答えるのだ。

「どうか国王にはご安心くださるようお伝えください。われわれは、かならずや力をつくして殿下を教え導くでありましょう。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com